

『源氏物語』光源氏の「きよら」再考

——近接語に着目して——

岸 ひとみ

〔要旨〕『源氏物語』における「きよら」という語の初出は、「世になくきよらなる玉の男御子」として登場する光源氏誕生の場面である。「きよら」という語は、「きよげ」と対比して、

「きよら」を一流の美、「きよげ」を二流の美として、両語を身分や血筋で区別するのが主流である。光源氏以外に、冷泉帝や夕霧、朱雀帝も「きよら」の人とされている。「きよら」という語に伴う語句を比較すると、光源氏と他の人物で相違が認められる。これらの近接語に着目することで、改めて光源氏を形容する「きよら」の考察を試みる。

光源氏に対する「きよら」という語は、他の人物への「きよら」とは異なる力を秘めている。語り手視点の場合は、超人性を与え、物語を展開していく原動力となる。作中人物視点の場合、その人物に美しいという気持ちだけでなく、それとは異

質の感情を呼び起こす働きがある。その他の人物に対する「きよら」は、光源氏を喚起するもの、または、他の人物と比較した相対的なものである。

「きよら」という語は、単なる美的語彙にとどまらず、光源氏を軸とする絶対的な「きよら」と相対的な「きよら」があることを明らかにした。

〔キーワード〕源氏物語、光源氏、きよら、近接語

はじめに

『源氏物語』における人物の美的表現の一つである「きよら」という語彙は、「きよげ」と対比して多くの先行研究があり、

「きよら」を一流の美、「きよげ」を二流の美として、両語を身分や血筋で区別するのが主流となっている⁽¹⁾。

『源氏物語』における「きよら」という語の初出は、光源氏誕生の「世になくきよらなる玉の男御子」(『新編日本古典文学全集』桐壺巻18頁)である。阿部秋生氏は、「世になくきよらなる」について、「ある意味ではこの条件が物語の展開してゆく大きな原動力の一つとなっている」と論じられている⁽²⁾。「世になく」という言葉が、「きよら」に上接し、光源氏の超越した美を表すとされ、「きよら」という語は、光源氏に最も多く使用されている⁽³⁾。

「きよら」「きよげ」の隣接語を見てみると、「きよら」にしか伴わない語がある⁽⁴⁾。その代表的なものが「世になし」「ゆゆし」という言葉で、両語は光源氏を形容する「きよら」だけに接続する。

先行研究では、「きよら」「きよげ」の両語に伴う語句の相違に注目されているが⁽⁵⁾、人物毎の隣接語の特徴や、隣接語と「きよら」との語法的関係を重視していないようである。隣接語には、「きよら」という語に上接して、「きよら」を修飾するもの、並列関係にあるもの、下接して因果関係を示すものがある。

り、区別して論じるべきであろう。

本稿では、「世になくきよら」という言葉を起点として、「きよら」という語の隣接や周辺に位置する語句に注目し、人物別に隣接語の特徴や「きよら」との文法上の関係を踏まえて、改めて光源氏に対する「きよら」という語の考察を試みる。

冷泉帝を「きよら」と形容するとき、常に光源氏に酷似していることが記述されている。夕霧については、夕霧を「きよら」と評する語り手や作中人物が、他の人物を意識する中で、そのように記している。光源氏の超人性を表現する言葉には、「世になし」「ゆゆし」以外に、「光」「玉」などが存在する。通常、人物に対する「きよら」は、すべて同じ意味と捉えるべきであるが、光源氏を形容する「きよら」という語自体に、それらに類似する特別なものが内在するのではないか。光源氏と他の人物に対する「きよら」の隣接語を比較することで、光源氏を「きよら」とする表現が持つ意味を捉えたい。

一、光源氏の「きよら」

光源氏を形容する「きよら」という語は、どのような語句を

伴っているのか見ていきたい。まず、光源氏に特徴的な言葉である「世になし」「ゆゆし」を取り上げる。光源氏誕生の場面で次のとおり語られる。

①世になきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。

(桐壺卷18頁)

「きよら」とは、新編頭注で「最上の美しさ」としている。「世になく」「玉」という語が「きよらなる」に隣接し、超人的な美を持つ主人公が登場する。「世になく」に類似する語句は、「この世のものともおぼえたまはず」(若紫卷224頁)、「この世に見えぬ心地して」(行幸卷297頁)と、光源氏に対し、これ以降も用いられる。加えて、「ゆゆし」という言葉を伴うのが、二例ある。共に「きよら」の近接語として、「この世のもの」ではないという表現があるが、両語と「きよら」との語法的関係が異なる。

②いとどこの世のものならずきよらにおよすけたまへれば、いとゆゆしう思したり。明くる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、

(桐壺卷37頁)

③海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふ御さまのゆゆしうきよらなること、所がらはましてこの世のもの

見えたまはず。

(須磨卷200頁)

用例②は、地の文であるが、語り手が桐壺帝の視線・心に即して「きよら」と記述しているので、桐壺帝の視点となる。以下、地の文の用例における視点についても同様に扱う。

用例①と同様に、「この世のものならず」が、「きよら」を修飾している。その結果、桐壺帝は「ゆゆしう」という感情を持ち、光源氏を東宮に、とまで思っている。新編頭注で、「あまりに美しいものは鬼神に魅入られるという俗信からの発想」と記している。

用例③は、供人の視線が語り手の視線と同化し、光源氏が「きよら」である様子が「この世のものに見えたまはず」とされている。用例②とは異なり、「きよら」を修飾するのは、「ゆゆしう」である。「ゆゆしう」という語は、②では桐壺帝の心情であるのに対して、③は光源氏の実質を表現している。

藤田加代氏が、「ゆゆし」について「この世のもの」ならぬ怪しい「力」を呼ぶ美」とされている⁽⁶⁾。「ゆゆし」と「きよら」が結びつくことで、「きよら」という語が、神性を感じさせるような美となっている。「世になく」「この世のものならず」「ゆゆしう」という語句が、「きよら」を修飾して、光源氏

の美が超人性を持つと読める。

そこで、「きよら」に上接する語が、「なまめかし」のように、後述の朱雀帝の「きよら」、薫に対する「きよげ」（総角巻331頁）にも接続して、光源氏固有のものでない場合は、どうなっているのか見ていきたい。

④入り方の月いと明きに、いとどなまめかしうきよらにて、ものを思いたるさま、虎、狼だに泣きぬべし。

（須磨巻169頁）

⑤雪の光に、いとどきよらに若う見えたまふを、老人ども笑みさかえて見たてまつる。

（末摘花巻292頁）

⑥桜の御直衣にえならぬ御衣ひき重ねて、たきしめ装束きたまひて罷申ししたまふさま、隈なき夕日にいとどしくきよらに見えたまふを、女君ただならず見たてまつり送りたまふ。

（薄雲巻438頁）

用例④は、女房の視点であるが、途中から、語り手が光源氏の「きよら」美に対して「虎、狼だに泣きぬべし」としている。『河海抄』の「仏根涅槃の時は虎狼も花をくひ人を舐てかなしむと云へり」という注から④、『玉上評釈』では、「源氏の離京は、仏の涅槃にもたとえられよう」とされている。光源

氏を仏に見立て、「きよら」という語だけで、用例①から③と同様に、光源氏の美に超人性をもたらしている。

用例⑤は、老女房の視点で、光源氏の姿を見て「笑みさかえて」と、喜びを顔一杯に表している。老女房は、貧しく人の訪れもない寂しい暮らしの中で、光源氏の来訪で今までの辛さが吹き飛ぶような気持ちになっている。阿部秋生氏は、「相好を崩している裏にある、好色な、しかも強い打算を伴った物見高い性根」を描いているとされ⑧、老女房は単純に光源氏の美しさに感動しているわけではない。

用例⑥は、紫の上の視点で、美しく着飾った光源氏を見て「ただならず」と、光源氏の姿をただ美しいと思うだけでなく、明石の君を訪問することに嫉妬している。

次に「きよら」に一例しか隣接しない語句を取り上げる。

⑦ことさらに田舎びもてなしたまへるしもいみじう、見るに笑まれてきよらなり。

（須磨巻213頁）

⑧戯れたまふ御さまの、にほひやかにきよらなるを見たてまつるにも、かかる人に並びて、いかばかりのことにか心を移す人はものしたまはむ、

（若菜上巻144頁）

用例⑦は、頭中将の視点である。光源氏が須磨で辛い暮らし

を送り、やつれているだろうと、頭中将には心配や不安もあつたであろう。しかし、光源氏が質素な身なりをしているにもかかわらず、かえつて素晴らしく、「見るに笑まれてきよら」であると記されている。「見るに笑まれて」という語句は、玉鬘を「け劣りたれど、見るに笑まるさま」(野分巻280頁)と描くように、美質を絶対化する言葉ではない。

用例⑧は、柏木が源氏の様子を見て「にほひやかにきよら」と感じている。「にほひやか」が、「きよら」を修飾するのではなく、両語は並列関係にある。美的形容として男性に対するものは、否定形を除くと、匂宮の「にほひやかにをかしければ」(東屋巻46頁)だけである。

松井佳子氏、吉海直人氏が、「にほひやか」と「きよら」は辞書的には相容れないが、両者を融合させた美とし、それが光源氏の絶対美と論じられている^⑨。柏木が光源氏の美しさに圧倒され、女三の宮に情けをかけてもらうことは無理だと絶望し、その後、柏木に苦悩を呼び起こすことになる。光源氏を美しいと思うだけでなく、「きよら」と感じる人物の心を乱している。光源氏の「きよら」自体に絶対美を認め、柏木を絶望の淵に突き落とす力となっていると捉えたい。

次は、これまでのものとは異なり、光源氏の髪に対するものである。

息所の見ましかばと思し出づるに、たへがたきを心づよく
念じかへさせたまふ。
(桐壺巻45頁)

光源氏元服の儀の場面で、桐壺帝が光源氏の髪を「きよら」とであると形容し、桐壺更衣を思い出している。この場に登場する人物について、「おはします殿の東の廂、東向きに倚子立てて、冠者の御座、引入れの大匠の御座御前にあり。申の刻にて源氏参りたまふ」(桐壺巻45頁)と描写され、この配置では、桐壺帝からは光源氏の顔はあまり見えず、髪が見えているだけである^⑩。

桐壺帝は光源氏の今までの成長の様子を思い出し、我が子を慈しむ桐壺更衣の面影を見ているのであろう。桐壺帝には光源氏の顔がよく見えていないことから、「きよら」という語が光源氏を喚起し、桐壺更衣を想起したのではないか。

語り手から超人的な美を与えられた光源氏は、作中人物視点の場合では、光源氏を形容する「きよら」という表現は、他に類がないほど美しいというだけではなく、人の心を揺り動かす

力を持つ。それは美しいものに感動したり、美しいから好意を持つというのではなく、「美」以外のものに向けられる異質の感情を引き起こす力を持っているといえよう。

二、冷泉帝の「きよら」

冷泉帝は、「同じ光にてさし出でたまへれば、暇なき玉」（紅葉賀巻328頁）と、光源氏と同様に赤児に対する最高の賛辞があった。

冷泉帝が誕生した時点では、「いとあさましようめづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず」（紅葉賀巻326頁）と語り手から評され、桐壺帝が初めて冷泉帝を見た時は、「あさましきまで紛れどころなき御顔つきを、思しよらぬことにしあれば、また並びなきどちはげに通ひたまへるにこそはと思ほしけり」（紅葉賀巻328頁）と、光源氏に瓜二つであることが繰り返される。

共に真実を知る語り手の視点で、初めて冷泉帝の容貌を記述し、光源氏に酷似していることが、これからの物語を展開するにあたって、基底となっている。しかし、この場面で冷泉帝を

「きよら」と描写することはない。

冷泉帝がはじめて「きよら」と表されるのは、藤壺が東宮の冷泉帝に対面している場面で、藤壺の視点で記されている。

⑩御髪はゆらゆらときよらにて、まみのなつかしげににほひたまへるさま、おとなびたまふままに、ただかの御顔を抜きすべたまへり。
（賢木巻115頁）

⑪御齒のすこし朽ちて、口の内黒みて、笑みたまへるかをりうつくしきは、女にて見たてまつらまほしうきよらなり。いとかうしもおぼえたまへるこそ心憂けれど、
（賢木巻116頁）

用例⑩の前に、「涙の落つれば、恥づかしと思して、さすがに背きたまへる」（賢木巻115頁）という記述がある。東宮の冷泉帝が、藤壺に泣き顔を見られたくないので、顔を背けたため、髪が揺れ、藤壺はそれを見て「きよら」と感じた。冷泉帝は六歳で、角髪を結っており、藤壺から見えるのは、冷泉帝の「髪」と「まみ」だけである。この点は、用例⑨の桐壺帝の視線と類似している。

続く用例⑪で、藤壺は、冷泉帝の歯と口の中が見えて、ほほ笑む顔を正面から見ている。「女にて見たてまつらまほし」が、

「きよら」に接続するのはこの一例だけである。「女にて見る」という言葉について、吉海直人氏が、『源氏物語』の特殊表現として、天皇家特有の女性的男性美を形容するものとされている^⑩。雨夜の品定めの場合で、光源氏の打ち解けた様子を「女にて見たてまつらまほし」（帚木卷61頁）と記述するのが、物語での初出であることから、この語句が、光源氏を思い起こす表現であると捉えたい^⑪。

二つの「きよら」の用例は、共に冷泉帝が「きよら」と形容された後に、光源氏とそっくりであると記され、同じような描写に見える。しかし、用例^⑩は、^⑪とは異なり、藤壺には冷泉帝の顔がはつきりとは見えていないにも関わらず、光源氏に瓜二つと思っている。藤壺は幼い頃の光源氏を思い起こしており、冷泉帝の顔を見て思い出したのではない。「おとなびたまふままに」とあるので、冷泉帝が成長とともに変わっていく顔を光源氏と見比べている。

冷泉帝の髪を「きよら」と思った後に、光源氏とそっくりと感じているということは、記憶の中で光源氏を思い浮かべていることになる。用例^⑩では直接冷泉帝の顔を見ているので、そこから光源氏を思い出している。両用例によって、過去から現

在に至る時の流れの中で藤壺は二人を見つめていることにな
る。「きよら」という語は、光源氏を呼び起こす言葉といえそ
うである。

次の二例は、地の文であるが、玉鬘視点で記述されている。

^⑫月の明きに、御容貌はいふよしなくきよらにて、ただかの
大臣の御けはひに違ふところなくおはします。かかる人は
またもおはしけりと見たてまつりたまふ。
(真木柱卷385頁)

^⑬濃くなりはずまじきにや」と仰せらるるさま、いと若くき
よらに恥づかしきを、違ひたまへるところやあると思ひ慰
めて聞こえたまふ。
(真木柱卷385頁)

この時、玉鬘は本意にも髭黒と結婚し、宮中に出仕してい
る。玉鬘が、冷泉帝を初めて見たのは、冷泉帝の行幸の場
面で、「帝の、赤色の御衣奉りてうるはしう動きなき御かたはら
目に、なすらひきこゆべき人なし」（行幸卷291頁）と記述され、
玉鬘が、冷泉帝を「きよら」と思うことはなかった。続いて、
玉鬘の視線が内大臣や他の殿上人に移り、「源氏の大い御顔
ざまは、別物とも見えたまはぬを、思ひなしのいますこしいつ
かしう、かたじけなくめでたきなり」（行幸卷291頁）と描かれ

ていた。

玉鬘が冷泉帝を「きよら」と表していない場面では、冷泉帝が一番素晴らしいとして、その比較対象の一人として、冷泉帝に似ている光源氏を挙げています。

用例⑫で「いふよしなし」が、「きよら」を修飾している。

「いふよしなし」は、単独で光源氏を形容する二例に用いられている¹³⁾。玉鬘は、冷泉帝の顔を「きよら」と感じてから光源氏を思い浮かべている。

用例⑬では、冷泉帝の様子に対して「きよら」としている。

「若し」は「きよげ」にも上接し、両語は並列関係にある。玉鬘は、冷泉帝が自分に対して光源氏のような恋情を抱いているかと思っていたのに、そうではなかったことに気づく。これは、光源氏の自分に対する感情と同じで、光源氏が自分に懸想したことを思い出している。用例⑭とは異なり、光源氏の自分への振る舞いを想起している。

次は語り手の視点で、冷泉帝の元服に際しての描写である。

⑭ 十一 になりたまへど、ほどより大きにおとなしうきよらにて、ただ源氏の大納言の御顔を二つにうつしたらむやうに見えたまふ。いとまばゆきまで光りあひたまへるを、世人

めでたきものに聞こゆれど、

(濬標巻281頁)

冷泉帝が光源氏に生き写しであることが述べられ、「まばゆきまで光りあひたまへる」と、光源氏と冷泉帝の「きよら」の美が、重ねられている。語り手が冷泉帝を「光」と、最上の美質で表現するのは、「月日の光の空」(紅葉賀巻349頁)のように、二人を並べて表現したときだけである。

このように、冷泉帝が「きよら」とされる場合は、光源氏と瓜二つであることとセットになっており、作中人物視点では、光源氏を喚起する語句となつているといえよう。

三、夕霧の「きよら」

本章では夕霧を取り上げる。夕霧は、誕生時に光源氏から、「まみ、口つき、ただ春宮の御同じさまなれば」(葵巻78頁)と記され、夕霧は冷泉帝によく似ている。夕霧が、初めて「きよら」と記述されるのは、次の用例である。

⑮ 直衣などさま変れる色聴されて参りたまふ。きびはにきよらなるものから、まだきにおよすげて、され歩きたまふ。帝よりはじめたてまつりて、思したるさまなべてならず、

世にめづらしき御おぼえなり。(少女巻62頁)

夕霧はこの前に元服し、十二歳になっている。冷泉帝の元服時は用例⑭で、共に語り手の視点であるが、「きよら」に上接する語は異なる。冷泉帝は「おとなしうきよら」、夕霧は「きはにきよら」と、対照的である。夕霧に対しては、冷泉帝の「光あひたまへる」というような、光源氏と重ねた賛美はない。

それまで夕霧は気が鬱いでいたが、浅葱色と異なる色を聴され、自信に満ちて宮中に参内している。帝を含めて周囲の者が夕霧を大事にしている。夕霧が「きよら」であるからではなく、光源氏の子であるためである。

次の二例も、語り手視点であるが、その視線が夕霧以外の人物にも注がれている。

⑯ いづれとなくをかしき容貌どもなれど、なほ人にすぐれて、あざやかにきよらなるものから、なつかしうよしづき恥づかしげなり。(藤裏葉巻436頁)

⑰ あらまほしくつくしげなる御あはひなれど、女は、またかかる容貌のたぐひもなかなからんと見えたまへり。男は、際もなくきよらにおはす。(藤裏葉巻457頁)

用例⑯は、夕霧を「人にすぐれて」と、内大臣である頭中将

一族との比較で、内大臣達を圧倒して「きよら」と記している。以前は、夕霧に対して「をさをさはひ劣らずよそほしくて」(藤裏葉巻432頁)としたのに、この場面では夕霧の美的評価が高められている。内大臣が雲居雁と夕霧の結婚を許す展開を、語り手が後押ししているようにも取れる。

「あざやか」は、夕霧に対する「もの清げ」(夕霧巻471頁)にも上接する。単独では、髭黒について「かの並びなき御光にこそ庄さるれど、いとあざやかに男々しきさまして」(真木柱巻364頁)という用例があり、美的には劣位にある人物に対して、この語が使用されている。

用例⑰では、雲居雁の顔は人並みに美しいとして、夕霧を雲居雁との対比で「きよら」としている。この場面の前で雲居雁は、「ねびまされる御ありさま、いとど飽かぬところなくめやすし」(藤裏葉巻441頁)と、語り手から褒められていた。同じように、雲居雁が夕霧と共にいるのに、この場面では雲居雁への美的評価が低くなっている。夕霧と雲居雁を対照的に描き、以前に乳母が夕霧を馬鹿にしたことに対して、語り手は夕霧に味方しているかのようである。「きよら」に接続する「際もなくし」は、この一例だけである。単独では、薫に対して「際もな

きさま」(東屋巻51頁)というものがある。

次に、作中人物視点で夕霧を「きよら」と表したものが四例ある(14)。

⑱ 同じ色のいますこしこまやかなる直衣姿にて、櫻巻きたまへる姿しも、またいとなまめかしくきよらにておはしたり。(藤袴巻329頁)

⑲ 例の、弁の君、宰相などのおはしたると思しつるを、いと恥づかしげにきよらなるもてなしにて入りたまへり。(柏木巻328頁)

⑳ これは、いとすくよかに重々しく、男々しきけはひして、顔のみぞいと若うきよらなること、人にすぐれたまへる。(柏木巻332頁)

㉑ 容貌も盛りにはほひて、いみじくきよらなるを、御目にとどめてうちまもらせたまひつつ、(若菜上巻24頁)

いづれも「きよら」に上接する語は、「きよげ」にも接続する。用例⑱は、地の文であるが、女房の視点である。この前に玉鬘の容貌が描かれているので、玉鬘を意識して、夕霧は「きよら」となっている。共に大宮の孫であるが、夕霧が玉鬘よりも美的に優位となっている。

用例⑲の場面では、女房は、弁の君、宰相などが訪問したと思っていたのに、思いもかけず美しい夕霧であったので、「きよら」としている。間接的に夕霧を弁の君、宰相などと対比している。

用例⑳は、語り手の視点から女房の視点へ移動しており、「これは」として、女房がこの直前の「かの君」(柏木巻332頁)の柏木と比べて、夕霧を「きよら」と感じている。用例⑲と共に女房達の、夕霧に落葉の宮へ来訪することを期待する気持ちがうかがわれる。

用例㉑では、この時、朱雀院は夕霧を女三の宮の婿にどうかと思案しており、夕霧が参上した時点からずっと、朱雀院は光源氏のことを思い浮かべている。

夕霧については、用例⑱から㉑は、他の人物と比較した相対的な「きよら」となっている。用例⑱、㉑では、女房の視点で、今まで最高に美しいと感じていた人物よりも美しいということで、夕霧が最高の美を持つという結果になっている。用例⑮、㉑では、夕霧を「きよら」と思う時には、光源氏が意識されている。夕霧に対する相対的「きよら」の対義語として、絶対的「きよら」というのは、唯一無二の美を持つ光源氏の「き

よら」になるといえよう。

四、「きよら」の位相

冷泉帝と夕霧に対する「きよら」の考察から、光源氏を喚起・意識する「きよら」、相対的な「きよら」という二つの基準が見えてきた。他の「きよら」の人としては、朱雀帝と匂宮が該当するが、匂宮は別稿で正編の「きよら」とは異なることを述べたので^⑮、朱雀帝について、以下順次五例を見ていきたい。

⑳御容貌もいときよらにねびまさらせたまへるを、うれしく頼もしく見たてまつらせたまふ。
(賢木卷96頁)

桐壺院は、朱雀帝に光源氏への思いを告げ、その遺言に違背しないことを繰返し誓う朱雀帝に対して「きよら」としている。桐壺院は、朱雀帝が美的には光源氏に劣ると思っていた。しかし、朱雀帝が帝として立派になっていく様子を見て、光源氏と同様に愛しく思い、「きよら」と表した。

次の二例は、朧月夜の視点である。

㉑御さま容貌もいとなまめかしうきよらなれど、思ひ出づる

ことのみ多かる心の中ぞかたじけなき。
(須磨卷197頁)

⑳御容貌などなまめかしうきよらにて、限りなき御心さしの年月にそふやうにもてなさせたまふに、めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりし気色心ばへなど、
(濔標卷281頁)

用例⑳は、朧月夜が、朱雀帝を「きよら」と感じているが、心の中は「思ひ出づること」として、光源氏を愛おしく思っている。用例㉑は、「めでたき人」と、光源氏を思い起こしている。光源氏と同じくらい朱雀帝が美しいから、「きよら」ということではない。朱雀帝を光源氏と対比して、朱雀帝の自分への想いを感じて「きよら」となったのであろう。

次は、秋好中宮の視点である。

㉒いにしへ思し出づるに、いとなまめききよらにて、いみじう泣きたまひし御さまを、そこはかとなくあはれと見たてまつりたまひし御幼心もただ今のこととおぼゆるに、
(絵合巻371頁)

秋好中宮が、伊勢に下向するに先立ってなされた宮中儀式の時の朱雀帝の様子を回想している。秋好中宮の傍らに光源氏がいて、秋好中宮に朱雀院に手紙を出すように勧めている。物語

の中で明記されていないが、秋好中宮の光源氏への想いはそれほどでもなく、八年ほども前の時の朱雀帝の様子を、たった今のことのように思い出していることから、朱雀帝の姿が目には焼き付いており、母親に冷淡であった光源氏よりも、朱雀院を慕っていたといえよう。

作中人物視点で、朱雀帝を「きよら」と表したときに、用例⑳、㉑では朱雀帝を光源氏と対比し、用例㉒、㉓では光源氏を意識している。

続いて、語り手の視点による行幸の場面である。

㉔院もいときよらにねびまさらせたまひて、御さま、用意、なまめきたる方にすませたまへり。
(少女巻71頁)

「院も」として、光源氏が意識され、共に「きよら」と評されている。

次に「きよげ」の人で、例外的に「きよら」とされた用例では、頭中将と薫が該当する。薫については、光源氏が自分に似ていれば「きよら」と思い、光源氏視点の薫の「きよら」は、薫が実の子に思われるという意識を喚起すると別稿で述べた(16)。

頭中将について、次のように記されている。

㉕いときよらにもものしくふとりて、この大臣ぞ、今さかりの宿徳とは見えたまへる。主の院は、なほいと若き源氏の君に見えたまふ。
(若菜上巻100頁)

語り手の視点で、頭中将の姿を「きよら」とし、光源氏と対比している。「いと若き源氏の君」という表現は、四十歳の光源氏に対して違和感がある。福井佳代子氏は、「頭中将の「きよら」は頭中将自身の資質ではなく、光源氏の恋物語の主人公の素質を強調する役目があった」とされている(17)。光源氏は若くはないが、女三の宮の密通事件が後に起こるので、若く魅力的でなければならぬ。頭中将を「きよら」とすることで、光源氏がより「きよら」であることを示唆する言葉と解した。

女君に対する「きよら」という形容は、男君に比べて用例数が少なく、語り手視点では玉鬘だけである。女君は男君と異なる要素があり、本論では二つの基準のうち、相対的な「きよら」として、玉鬘と大宮の「きよら」を抜粋して取り上げたい。

㉖この君ねびととのひたまふままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。
(玉鬘巻92頁)

語り手は、玉鬘を「母君よりもまさりて」と、夕顔と比較して「きよら」と評している。福井佳代子氏は、玉鬘を「きよら」の人として、例外的な「きよら」を、主人公性を与えるものとされている¹⁸。語り手が玉鬘を単に「きよら」とせず、相対的な「きよら」としたのは、紫の上に比べると玉鬘は美的には劣るが、夕顔を引き出すことで「きよら」として、読み手に今後の光源氏との恋の展開への期待感を持たせたのであろう。

⑲大宮の容貌ことにおはしませど、またいときよらにおはし、ここにもかしこにも、人は容貌よきものとのみ目馴れたまへるを、
(少女巻68頁)

大宮の「きよら」は、夕霧の視点である。夕霧は、花散里を「容貌のまほならずもおはしけるかな」(少女巻67頁)と評しており、器量がそれほどでもない女性に対する思いを、大宮との美しさと対比して語っている。大宮は尼姿で高齢であることから、単に「きよら」とするのではなく、相対的な「きよら」としたのであろう。

おわりに

『源氏物語』における「きよら」という語の初出である「世になくきよら」を出発点として、光源氏の「きよら」に焦点をあてて男君を中心に考察した。「きよら」という美的語彙は、「きよげ」と対比して、両語を身分や血筋で区別し、主体となる人物に関わらず、一律に捉えられてきた。

「きよら」という語に接続する言葉は、『源氏物語』では、『うつほ物語』に比べて格段に豊かになっているが、先行研究では、人物毎の隣接語の比較や、隣接語と「きよら」との語法的関係は、あまり注視されていない状況である。

個々の人物の「きよら」という語の近接語に着目した結果、光源氏と他の人物で相違が認められた。光源氏に対する「きよら」という語は、他の人物の「きよら」とは異なる力を秘めている。語り手視点の場合は、物語の進展に伴い、「きよら」という語自体に超人性を与え、物語を展開していく原動力となり、作中人物視点の場合には、その人物に美しいという思いだけでなく、それとは異質の感情を呼び起こしている。

冷泉帝や朱雀帝に対する「きよら」という語は、光源氏を喚起・意識するもので、夕霧は、主として他の人物との比較による相対的な「きよら」であった。正編に登場する男君に対しては、この二つの基準が適用できる。女君については今後の課題とした。

相対的な「きよら」以外は、絶対性を持つ光源氏の「きよら」と光源氏を喚起・意識する「きよら」であることから、絶対的「きよら」は、光源氏を核とするものといえよう。

「きよら」は、単なる美的語彙にとどまらず、光源氏を軸とする絶対的な「きよら」と相対的な「きよら」があることを明らかにした。

〔注〕

(1) 大野晋氏「④の物語」『源氏物語「古典を読む」(岩波書店) 一九八四年五月

(2) 阿部秋生氏「光源氏の容姿」『光源氏論―発心と出家』(東京大学出版会) 一九八九年八月

(3) 光源氏を「きよら」とする用例は、会話を除いて十五例である。会話文は、話し手が意図的に使用する場合もあ

るので除外した。内訳は、語り手からは一例、語り手と作中人物の視点が混在しているもの、桐壺帝、自分から各二例、頭中将、紫の上、玉鬘、柏木は各一例、その他四例である。本人視点の「きよら」と、他者視点の「きよげ」各二例については、拙稿「源氏物語」薫の「きよら」考」『同志社女子大学日本語日本文学』第三十一号二〇一九年六月で論じた。本稿で取り上げていない他者視点の「きよら」については、光源氏がどのような状態でも「きよら」であることを示すものと解した。

(4) 「世になし」(類語を含む)、「ゆゆし」(間接的接続を含む)という隣接語の用例は各二例で、「きよら」にのみ接続する(別表「きよら」「きよげ」隣接語一覧参照)。

(5) 中西良一氏「源氏物語に於ける「清ら」「清げ」『学芸研究 人文科学』二(和歌山大学学芸学部) 一九五二年二月

(6) 藤田加代氏「光源氏覚え書き―「ゆゆし」と「ひかる」に関わって―」『日本文学研究』第三十七号二〇〇三年三月

(7) 「河海抄卷第六」『源氏物語古注釈大成 第六卷』(日本

図書センター) 一九七八年十月

(8) 阿部秋生氏(注2) 論文

(9) 松井佳子氏・吉海直人氏『源氏物語』「にほひやか」

考』『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第十八号二

〇一八年三月

(10) 「光源氏の元服」の図を参照。東京大学国文学研究室蔵

慶安三年跋承応三年版『源氏物語』、『絵本源氏物語』貴重

本刊行会一九九五年(日向一雅氏『源氏物語―その生活と

文化』(中央公論美術出版)二〇〇四年二月より)

(11) 吉海直人氏「源氏物語の男性美―「女にて見る」をめぐ

つて」『源氏物語研究〈而立篇〉』(影月堂文庫)一九八

三年十二月

他に血統や王権に関わるとする論として、阿部秋生氏

(注2) 論文、立石和弘氏「女にて見奉らまほし」考―光

源氏の容姿と両性具有性」『國學院雜誌』第九十二巻第

十二号一九九一年十二月がある。

(12) 「女にて見たてまつらまほし」という語句は、絵合巻で

の朱雀院に対する用例と合わせて三例しかない。類似表現

の「女にて見る」というのは紅葉賀巻で二例ある。

(13) 光源氏に対して、「言ふよしなく見えたまふ」(須磨巻217

頁)、「いふよしなき御けはひなる」(明石巻247頁)とある。

これ以外には、藤壺に対して一例ある。

(14) 夕霧を「きよら」とする用例が、他に源氏の心内文で一

例(夕霧巻471頁)、会話文で三例ある。源氏の心内文の用

例については、拙稿(注3)で論じた。

(15) 句宮の「きよら」については、物語の人物の主観による

相対的な美的表現であることを、拙稿『源氏物語』句宮

の「きよら」再考―句兵部卿巻冒頭を起点として―『同

志社女子大学大学院文学研究科紀要』第二十一号二〇二一

年三月で論じた。

(16) 拙稿(注3)

(17) 福井佳代子氏「源氏物語における人物評価に関わる美的

語彙の研究―「きよら」「きよげ」を中心に―『国文橋』

第三十八号(京都橘大学)二〇二二年三月

(18) 福井佳代子氏(注17) 論文

別表 「きよら」「きよげ」隣接語一覽

	A きよら	B きよら	C きよげ	D きよげ
隣接語	ねびまさる 世になし(類語を含む) うるはし ゆゆし うつくし 見るに笑まれて おとなし きびは 際もなし にほひやか 愛敬づく まばゆし いふよしなし	なまめかし なまめく 若し 気高し 盛り めでたし あらまほし 限りなし あて あざやか ものものし 恥づかしげ	なまめかし なまめく 若し 気高し 盛り めでたし あらまほし 限りもなし あてやか あざやか ものものし 心恥づかしげ	きらきらし よしあり よしよしし いまめく けげざと 誇りか しなやか 古りがたし めやすし
	3 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1	7 2 4 2 2 2 1 1 1 1 1 1	2 2 3 1 1 1 2 1 1 1 1 1	2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

* A: 「きよら」のみに上接または下接する語句

B: 「きよら」(「きよげ」) 両方に上接または下接する語句

C: 「きよげ」(「きよら」) 両方に上接または下接する語句

D: 「きよげ」のみに上接または下接する語句

* 人物に対する美的語彙としての「きよら」「きよげ」の用例に限定した。

* 中西良一氏(注5)論文、谷口典子氏論文(「王朝文学における「きよし」系語彙の展開」『きよし』の系譜―王朝美表現の一考察

―)(桜楓社)一九七六年二月)、藤田加代氏論文(「「きよげ」「きよら」再考」その2、源氏物語における用例を中心にして」

『高知女子大学保育短期大学部紀要』第十七号一九九三年)にも両語の隣接語を比較した一覽表が記述されている。対象範囲や隣接

語の取捨により、別表に記載した用例数と相違する点がある。